



こども歴史なぜなに? 相談室



中世に風呂はあったのですか?

みなさんは、外で遊んで汗をかいた時や1日の終わりには、風呂に入ったり、シャワーを浴びたりしていると思います。

草戸千軒の町が栄えた中世の時代に風呂はあったのでしょうか。博物館の2階にある実物大で復元されている草戸千軒の町並みにある職人さんの家に風呂はつくられていません。実は、草戸千軒の発掘調査では、風呂の跡が見つかっておらず、よくわからないので復元していません。

しかし、中世に風呂がなかったわけではなく、室町時代の絵巻物「慕帰絵詞」のなかには風呂が描かれています。その風呂は、湯釜で発生させた蒸気を風呂屋形という小部屋に引き込み、蒸気浴する蒸し風呂形式のもの、現在のサウナ風呂のようなものでした。この絵と同じような風呂は、今も西本願寺飛雲閣と妙心寺に残っています。また、広島県の北西部、山県郡北広島町にある国の史跡「吉川氏城館跡」の「万徳院跡」から風呂の跡が見つかっています。見つかった建物は、東西3間、南北2



万徳院跡の風呂屋(復元)

間の大きさです。柱を立てた礎石といわれる石の並び、かまどの石組み、倒れた壁の一部などが残っていました。このため、西本願寺飛雲閣、妙心寺、絵巻物「慕帰絵詞」、江戸時代の大工技術書「愚子見記」、遺跡の周辺にある古い寺や神社の建物などを参考に、現地(万徳院跡)に風呂が復元されています。



万徳院跡の風呂屋形です。

万徳院跡の風呂の建物は、湯を沸かすために鉄釜がのせられたかまどのある焚き場や揚がり場などもあるので、実際に入る風呂屋形は広いものではありませんが、大人4人が座って入れる広さです。風呂屋形の中は、蒸気で約50度にもなり、マイルドな蒸気と木の香りが充満し、気持ちよく汗を出すことができます。そして、風呂には裸で入るのではなく、「ゆかたびら」という白装束を着て入ることが作法であり、現在の「浴衣」はその名残

です。仏教では風呂や湯を民衆に施すことが功德とされたため、寺の多くには湯屋(風呂)が設けられ、次第に村にも設けられるようになりました。風呂はある種のコミュニティセンターとしての機能を果たしていたようで、今は少なくなった銭湯や湯治場でみられる人々の交流の様子と同じものであったようです。